

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



18

よろこびの知らせ
第18集

目 次

主の名を呼ぼう	1
ローマ 10:11-13	
信じる幸い	10
ヨハネ 20:24-29	
信仰と行い	19
ヤコブ 2:14-1	
キリストを知る	28
ペテロ第二 1:1-4	

ここに収められたメッセージは、2021年1～4月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

主の名を呼ぼう

ローマ 10:11-13

10:11 聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

10:12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。

10:13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

きょうの箇所は 13 節、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」、これは、「ローマ人への手紙による救いの道」の第五番目の御言葉です。救いの道を説明するのに、この御言葉をどう用いるかは、別の機会にお話しすることにして、きょうは、パームサンデーですので、イエスの受難の週の中で起こった出来事との関連の中で、この御言葉を思い巡らしてみたいと思います。日曜日、イエスがろばの子に乗ってエルサレムに入城されたとき、人々は「主の御名」を呼びました。木曜日の夜、イエスは十字架を前にして、「主の御名」を呼ぶことを弟子たちに教えています。そして、金曜日、イエスが十字架にかけられたとき、「主の御名を呼んで」救われた人がいました。これら三つの出来事を振り返ってみましょう。

一、御名を呼んだ群衆

「主の御名を呼ぶ。」これが聖書で最初に出てくるのは、創世記 4:26 です。新改訳第 2 版では「そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた」と訳されて

いますが、新改訳 2017 では「そのころ、人々は主の名を呼ぶことを始めた」と訳されています。「主の御名を呼ぶ」には「祈る」という意味があるので、そう訳されたわけですね。

また、「主の御名を呼ぶ」には「祈る」だけでなく、「賛美する」あるいは「礼拝する」という意味もあります。アダムのふたりの子、カインとアベルが、アダムから教えられたとおりに祭壇に献げ物を持ってきたように、神への礼拝は人類の始めからありました。ところが、カインの子孫はまことの神から離れてしまいました。しかし、セツの子孫は神を敬い、神を礼拝する民となりました。それが、「主の御名を呼ぶ」ということでした。主の御名を呼んで礼拝する人々と、そうでない人々は今に至るまで別々の道を歩んでいます。神は、神を礼拝することのなかった人たちが神を礼拝するようになることを願っておられます。

さて、イエスがエルサレムに入城されたとき、群衆は、手に手にしゅろの葉を持ってイエスを迎え、こう叫びました。「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」（ヨハネ 12:13）これは詩篇 118 篇から取られた言葉です。詩篇 118:27 に「枝をもって、祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで」とあるのですが、人々は聖書の言葉どおり、しゅろの葉や木の枝を手を持って賛美しながら神殿に向かいました。

「ホサナ」は「救ってください」という言葉で、詩篇 118:25 では「ああ、主よ。どうぞ救ってください。あ

あ、主よ。どうぞ栄えさせてください」となっています。イエスに向かって救ってくださいと言うのですから、イエスが「救い主」であるということになります。

「祝福あれ」には二通りの意味があって、ひとつは、神が人をいつくしみ、人に恵みを与えること、もうひとつは人が神を「あがめ、賛美する」とことです。詩篇 118:28 では「あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます」とあって、ここでの「祝福あれ」が「主の御名によって来られる方」への賛美であることが分かります。群衆が「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」と叫んだ、そのことは「主の御名を呼ぶ」ことであり、救い主への祈りまた賛美であったのです。

イエスに反対していた人々はこの賛美の声を聞いて眉をしかめました。彼らはイエスに「先生。お弟子たちをしかってください」と言いましたが、イエスは答えて言われました。「もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」（ルカ 19:39-40）救い主が来られ、今まで「主の御名を呼ぶ」ことのなかった人々までもが、まことの神に祈り、主を賛美する時がやってくる。それは救いの成就のしるしとして聖書に預言されていたことでした。ゼカリヤ 13:9 に「彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民』と言い、彼らは『主は私の神』と言う」とあります。また、黙示録 7:9 に「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数え切れぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅ

ろの杖を手に持って、御座と子羊との前に立っていた」とあるように、かつて「異邦人」と呼ばれていた人々も、全世界で、救い主を信じ、礼拝する者とされました。「日の上る所から沈む所まで、主の御名がほめたたえられるように」（詩篇 113:3）との御言葉が、今、成就しています。私たちも「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に」と賛美し、主が十字架と復活によって成し遂げてくださった救いをあらためて感謝したいと思います。

二、御名を与えられた弟子たち

次に「主の御名」について書かれているのは、受難の週の木曜日のことです。この日、イエスは弟子たちと共に過越の食事を守った後、夜中まで長い時間、弟子たちに数々のことを教えました。イエスはその中でこう言われました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」（ヨハネ 16:23-24）イエスは、ここで弟子たちに、ご自分の名で祈ることを教え、イエスの御名が持つ権威や力を弟子たちに分け与えてくださったのです。

今も多くの国では、監獄に入れられると名前では呼ばれず「囚人番号」で呼ばれます。これは人格を剥奪されることで、大変な侮辱です。「名前」、それはたんに個

人を識別する記号ではありません。「名前」にはその人の人格や、地位、経歴、能力などが含まれています。

これは実際の話ですが、アメリカの永住権を申請していた人が、いつまで経っても返事が来ないので、友人のアメリカ人に移民局に問い合わせてもらいました。その前にその州の上院議員のオフィスに連絡して、その議員の秘書からレターをもらっておいたそうです。それを持って移民局に行ったら、すぐに永住権の申請が受理されたというのです。「何の某」という名前は、その人が何らかの地位、立場にあれば、たんなる名前で終わらず、力を持つのです。地上の人間の名前にさえ、そのような力があるなら、あらゆるものの主であるイエスのお名前にはどんなに大きな力があることでしょうか。

ペテロは「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」と言って、生まれつき足の不自由な人を癒やしました。それを見て不思議に思っている人たちに、「このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです」と言って、「イエスの御名」を宣べ伝えました（使徒 3:6、16）。ペテロはそのために迫害を受けましたが、そのときも、ひるまずに「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです」（使徒 4:12）と言っています。イエスの御名にこそ全人類の救いがあ

るのです。私たちはこの御名を呼んで救われるのです。

このように、弟子たちは、イエスの御名を宣べ伝え、イエスの御名によって祈り、礼拝しました。それで、彼らは「御名を呼ぶ人々」と言われました（使徒 9:14、21）。サウロはこの「御名を呼ぶ人々」を迫害する人でしたが、ダマスコに向かう途中イエスに出会い、アナニヤから「さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい」と言われ、彼もまたイエスの「御名を呼ぶ」者とされました（使徒 22:16）。

「イエスの御名」には人を救い、造り変える力があります。なぜでしょうか。イエスが死から復活され、今も生きて、力をもって働いておられるからです。かつての弟子たちは目に見える形でイエスと一緒にいることができました。それは大きな特権でした。しかし、それはわずか数年のことでした。弟子たちはイエスを天に見送ってから、それまでよりも長い年月を過ごしています。けれども、彼らはいつもイエスを身近に感じていました。日々にイエスの命に生かされ、その力によって福音を伝えました。イエスの「御名」に、イエスの臨在があります。彼らはその「御名」を持ち、その「御名を呼び求め」ることによって、イエスと共にいることができたのです。

この御名と、御名の持つ力は私たちにも与えられています。私たちは祈りの最後に「イエス・キリストのお名前前で祈ります」と言いますが、これは単なる「決まり文

句」ではありません。イエス・キリストの御名の力に信頼して、「イエス・キリストのお名前によって」と言うのです。私たちにも初代の弟子たちと同じ「イエス・キリストの御名」が与えられています。イエスの臨在と救いの力がそこにあります。この特権を、人々の救いのため、自分自身の信仰の成長のため用いようではありませんか。

三、御名を呼んで救われた人

さて、金曜日、イエスが十字架にかかれた時、御名を呼んで救われた人がいました。イエスの右と左にも十字架が立てられましたが、その一方にかけられた犯罪人が、「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください」と言いました（ルカ 23:42）。これもまたイエスの「御名を呼ぶ」祈りでした。

この人は「イエスさま」と呼びかけています。「イエスさま」という呼びかけそのものが「御名を呼ぶ」祈りなのです。古代から伝わる祈りに “Jesus Prayer” というものがあります。「主イエス・キリスト、神の御子、罪人である私をあわれんでください」という短い祈りです。私に “Jesus Prayer” を教えてくださった牧師は「Jesus だけでいいから、何度も口に出して祈りなさい。それから心の中で御名を唱えなさい」と指導してくださいました。「Jesus」、「イエスさま」と信頼を持って御名を呼ぶ、それだけでも立派な祈りになることを知りました。

この犯罪人は「イエスさま」と、御名を呼んで救われました。イエスは彼に「まことに、あなたに告げます。

あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」
（ルカ 23:46）と言って救いを約束されました。このことは、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」という御言葉を見事に証明しています。そうです、まごころから主の御名を呼び求めるなら、私たちの罪は赦され、神の国に受け入れられるのです。罪の支払う報酬である死はイエスが代わって引き受けてくださいました。イエスは復活して永遠の命を無償の贈り物として私たちに与えてくださいます。皆さんはイエスの御名を呼び、それを受け取っているでしょうか。

詩篇 116 篇に「主の御名を呼んだ」人の言葉があります。この人は、大きな苦しみに遭いました。そして、その中で主の御名を呼びました。「死の綱が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあつた。そのとき、私は主の御名を呼び求めた。」（3-4 節）すると、神はみごとにこの人を救い出されました。それで、こう言っています。「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。」（12-13 節）私たちもこの人のように主の御名を呼んで救われるのです。どんなことでも、神に助けを願い求めましょう。主はかならず、その願いを聞き、それに答えてくださいます。そして、私たちは、主が御名を呼ぶ者に答えてくださった感謝を献げるために、再び「主の御名を呼ぶ」のです。主の御名を呼んで答えられ、答えられて主の御名を呼ぶ。これは信仰の法則、また、祈

りの法則です。詩篇 116 篇は 1-2 節でこの信仰の法則を宣言しています。「私は主を愛する。主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。主は、私に耳を傾けられるので、私は生きるかぎり主を呼び求めよう。」

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」この御言葉の通り、どんなことでも「御名を呼び求めて」祈り、そして、祈りに答えてくださる神をほめたたえましょう。

(祈り)

恵み深い神さま。主の受難の週に、もういちど「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」との御言葉を与えられて感謝します。どんな人もまごころから主の御名を呼び求めれば救われる。この真理を私たちに堅く確信させてください。そして、私たちを生きるかぎり主の御名を呼び求める者としてください。主イエスのお名前で祈ります。

信じる幸い ヨハネ 20:24-29

20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らと一緒にはいなかった。

20:25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。

20:26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らと一緒にはいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように。」と言われた。

20:27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

20:28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」

20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

一、信じなかったトマス

日曜日の朝早く復活されたイエスは、マグダラのマリアをはじめ、女性の弟子たちに現れ、エルサレムからエマオに向かうふたりの弟子にも現われました。夕方には、弟子たちがエルサレムで集まっているところに現われ、その手とわき腹を見せました。両手には十字架にかけられた時に打ち込まれた釘あとが、わき腹には槍で刺された傷あとが残っていました。弟子たちは、それを見ただけでなく手で触れて、イエスがよみがえられ、生きておられることを確認しました。それはどんなに驚くべ

きこと、また、うれしいことだったことでしょう。

ところが、その時、トマスは、そこに居合わせませんでした。トマスが仲間のところに戻ってきたときには、イエスはそこにはおられませんでした。他の弟子たちはトマスに、「私たちは主を見た」と興奮して伝えましたが、トマスは「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言って、他の弟子たちの言うことをすぐには受け入れませんでした。

このことから、トマスは英語で “Doubting Thomas”（疑い深いトマス）と呼ばれるようになりましたが、トマスは、全く不信仰で、復活を否定したのでしょうか。そうではないと思います。トマスは他の弟子たちが皆イエスを見たのに自分は見えていないということで、取り残されたような気持ちになったのだと思います。「イエスは他の弟子たちに現われてくださったのに、なぜ私には現われてくださらなかったのか。」そんな悔しさがあったのでしょうか。「自分の目でイエスを見、イエスのからだに触れてみなければ信じない」と言い張りましたが、トマスの心には、「私もイエスを見たい。イエスに触れたい」という強い願いがあったのです。

トマスはとても感じやすく、また、率直な人でした。ペレアに来ていたイエスが、もう一度ユダヤに戻ろうと言ったとき、他の弟子たちは「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか」と言いました。しかし、

トマスは「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」と言っています（ヨハネ 11:8,16）。トマスには、どんな危険があても、どこまでもイエスに従うという覚悟がありました。もちろん、覚悟はどんなに立派でも、人は弱いもので、イエスが捕まえられたときには、トマスも他の弟子たちと同じようにイエスを見捨てて逃げてしまいました。トマスは自分の言った言葉を守ることができませんでしたが、その言葉は心からのものでした。

イエスは十字架にかかれる前の夜、弟子たちを教えてこう言われました。「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています。」（ヨハネ 14:3-4）するとトマスは「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう」（同 14:5）と言いました。イエスの言葉の意味が分からなかったのはトマスだけだったのでしょうか。弟子たちは後に聖霊を受けてから、理解するようになりましたが、そのときはイエスの言葉の意味が分かっていませんでした。他の弟子は、トマスのように率直に分からないことを分からないこととして、それを尋ねることをしませんでした。トマスは分からないことを、分からないと正直に、率直に言うことができる人、「疑問」を解決したいと追求する人でした。

信仰を持つからには、どんな疑問も持つてはいけないと考える人もありますが、「信仰」と「疑問」は相反するものではありません。「疑問」と「疑い」とは違います。「疑問」は、分からないことを知りたい、御言葉の意味を理解したいという探究心から出たもので、それは信仰のひとつの表れです。神はそうした「探究心」を喜んでくださり、「疑問」に答えてくださいます。トマスは「疑い深いトマス」ではなく、「探究心の豊かなトマス」と呼ばれるべきかもしれません。

二、トマスに現れたイエス

イエスが最初に弟子たちに現われてから八日の後、イエスは再び同じ場所に現われました。そのときはトマスもいました。トマスが「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言ったのは、八日前のことで、イエスがそこにおられないときでした。しかし、イエスはそこにおられなくても、トマスの言ったことを聞いておられました。

私たちは、イエスがここにおられたら決して口にはしないだろうというようなことを、口にすることがあります。不平、不満、投げやりな言葉、あるいは、他の人を傷つけるような言葉です。しかし、そうした言葉もイエスはちゃんと聞いておられるのです。声になって出ない心の中の言葉さえも、イエスは聞き取ることができます。ですから、私たちには詩篇 19:14 の祈りが必要です。

「私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入

れられますように。わが岩、わが贖い主、主よ。」とくに「わが岩、わが贖い主、主よ」という部分が大切です。どんなに言葉に慎重な人でも、余計なことを、つい口にしてしまうことがあります。ヤコブの手紙にあるように、言葉で失敗のない人は誰もいません（ヤコブ 3:2）。ですから、私たちは、いつもそのことを悔い改めて、赦しと聖めを求める必要があるのです。主が、私たちの罪を赦し、そこから聖めてくださる「贖い主」であることを信じて、より一層、主に信頼していくのです。

イエスがトマスに「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい」と言われたのは、決してトマスに対する皮肉でも、叱責でもありません。トマスは十二弟子のひとりでしたから、復活されたイエスを目撃する必要がありました。イエスはもともとトマスに現われ、その傷跡を示そうとしておられました。それはトマスを「復活の証人」にするためでした。しかし、イエスはトマスに、もうひとつのことを期待していました。それは、トマスが他の弟子たちの証言を聞いて信じ、「見ないで信じる」人になることでした。イエスがトマスに「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです」と言われた通りです。

「信」という漢字は「人」と「言」が合わさってできています。ローマ 10:17 に「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによる」とあるように、信仰は神の言葉、また、神の言葉の証言を聞いて

てそれを受け入れ、それに従うことです。もし、どんなことでも見なければ信じられないとしたら、私たちはおそらく気が狂ってしまうでしょう。車のエンジンでガソリンがどのように爆発しているのか、コンピューターのCPUの中でどのように信号がやりとりされているのか、それを見て知っているのは、専門の技術者だけです。私たちはほとんどのことを見てはいないけれど信じています。そして、それによって生活が成り立ち、仕事をこなしています。それは神を信じること、イエスを信じることでも同じなのです。

三、トマスと私たち

ヨハネの福音書の最後の部分にトマスのことが書かれているのは、私たちのためです。私たちはイエスが地上におられたときから二千年以上も経った現代に生きています。今、この地上で、復活されたイエスを見ることはできませんが、イエスの復活は、それを目撃した弟子たちによって宣べ伝えられ、やがて書物に記録され、時代から時代へと伝えられてきました。それは、確かな事実、歴史の出来事で、二千年経っても、全世界でそれは覚えられ、祝われています。毎年イースターには、世界の三分の一、23億という人々がイエスの復活を祝い、また、イエスの復活を信じる人々は、日曜日ごとに、今も生きておられるイエス・キリストを礼拝しています。この人たちは復活されたイエスを見たわけではありません。イエスが私たちの罪のために十字架で死なれ、私たちに永遠の命を与えるために復活されたことを、聞い

て、信じたのです。そしてイエスへの愛と聖霊による喜びに満たされたのです。ペテロ第一 1:8に「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、榮えに満ちた喜びにおどっています」とある通りです。イエスがトマスに「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」、「見ずに信じる者は幸いです」と言われた言葉は、そのまま私たちに語られている言葉なのです。

「見ずに信じる」といっても、それは何の根拠もなく信じ込むということではありません。ヨハネ 20:30-31に「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである」とあります。イエスが神の御子キリスト、私たちの救い主であることには、客観的な証拠があるのです。また、イエスを信じて得られる愛、喜び、平安などといった体験もイエスを証しするものです。さらに、社会に正義や公平をもたらした人たちのほとんどが、イエスを信じる人々であることも、信仰の正しさを証明しています。

トマスは不安な八日間を過ごしたことでしょう。自分以外の弟子たちはみな「主にお会いした」と言って喜んでいのに、自分ひとりが「イエスの姿を見るまでは

…」と頑張っていたのです。トマスは強情な人のように見えたかもしれませんが、その心はイエスを求め続けていました。そして、ついにイエスにお会いしたのです。そのとき、トマスの心から一切の不安が消え去りました。トマスのたましいはイエスご自身によって満たされたのです。

わたしたちも、トマスと同じ熱意をもってイエスを求めたいと思います。聖書を読んで、自分が好きになれるような言葉をみつけて満足する。教会に来てみんなに会ってほっとする。日々の祈りや毎週の礼拝をそれだけで終わらせたくありません。「主よ、あなたにお会いしたいのです。もっとあなたを信じたいのです。あなたに従い続けたいのです」という思いをもって、主を求めたいと思います。私たちが主に手を伸ばすとき、主もまた私たちに手を差し伸べてくださいます。そして、その手には、十字架の釘あとが残されています。それで、手話ではイエスを表すのに、両手のひらを指でさすしぐさをします。イエスの手に復活ののちも十字架の釘あとが残されているのは、栄光のからだにふさわしくないように思えます。しかし、イエスはそれを、私たちへの愛のしるしと残しておられるのだらうと思います。あるいはその釘あとの中に私たち一人ひとりの存在を大切にしまい込んでいてくださるのかもしれませんが。今は、肉眼ではイエスの手の釘あとを見ることはできませんが、信仰の目ではそれを見ることができます。きょう、イースターにそれを見て、主の愛を確かめ、「信じる幸い」にさらに

満たされたいと思います。

(祈り)

「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」父なる神さま、御言葉によってイエスの十字架と復活の意味を教えてくださいありがとうございます。人は御言葉を聞いて、信じて、救われます。イエス・キリストの福音を「聞いている」私たちを「信じる者」とし、イエスを「信じている」私たちを「主を愛する者」とし、「信じる幸い」に満たしてください。イエス・キリストのお名前です。

信仰と行い

ヤコブ 2:14-19

2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

2:15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、

2:16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。

2:17 それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。

2:18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」

2:19 あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。

一、頭だけの信仰

さて、きょうは、「ヤコブの手紙」から、信仰と行いについて書かれているところを学びます。人は、イエス・キリストの福音を聞いて、信じて、救われるのですが、「信じる」とはどうすることでしょうか。イエス・キリストの福音を信じる「信仰」とはどんなものなのでしょうか。「信仰とはどんなものか」を学ぶ前に、それが「どんなものでないか」を学んでおきましょう。本物の「信仰」でないものに三つのものがあります。「頭だけの信仰」、「感情だけの信仰」、そして「利益だけの

信仰」です。

「頭だけの信仰」というのは、イエス・キリストの福音について、それを知識として知っているだけというものです。もちろん、信仰に知識がいらぬわけではありません。むしろ、聖書は私たちに「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい」と教えています（ペテロ第二 3:18）。私たちの信仰は盲信でも迷信でもありません。確かな事実、正しい知識に基づくものです。しかし、「イエス・キリストを知る知識」とは、たんに聖書の物知りになることや、神学を勉強するといったものではありません。人が人を知るということが、その人の経歴を調べるなど、その人のデータを集めることではないのと同じです。そんなデータを集めるのは、人材派遣会社や会社の人事部がやることであって、それは、人を人格として知ることとは違います。イエス・キリストを知るとは、友と友とが心を打ちあけあつて語りあい、お互いの内面を知り合うことに似たものです。

聖書や神学は、信仰を持たない人によつても研究されており、その研究の中には優れたものも多くあります。聖書が歴史的に正確で、新約聖書が紀元一世紀には成立しており、イエス・キリストの復活が信じられていたことを証明する研究が数多くあります。なのに、そうしたことを研究している人がイエス・キリストを信じていないのです。とても残念なことです。信仰には知識が必要ですが、知識だけでは信仰にはならないのです。

きょうの箇所は19節に「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています」とあります。これは、イエスが宣教を開始されたとき、悪霊が「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です」（マルコ 1:24）と叫んだことを指しています。悪霊は、イエスを特別なお方として知っていましたが、悪霊の持っていた知識は、彼らを救いませんでした。それで、「頭だけの信仰」は「悪霊の信仰」とも呼ばれてきました。神は人が悪霊と同じようになることを望んではおられません。だれもが悔い改めて救われるようにと願い、福音によって信仰に招いてくださっているのです。

二、感情だけの信仰と利益だけの信仰

次に「感情だけの信仰」ですが、これは、表面的で一時的な感情の動きだけで終わってしまうもののことを言います。「キリスト教」へのあこがれや好意といったものは、このカテゴリーに入ります。最近（2017年）、「日本研究」のため群馬大学で学んでいるイタリア人留学生が、群馬大学の学生の宗教意識を調査したのを見つけました。それによると、「あなたが信仰している宗教も含めて、親しみを感じる宗教はどれですか」という質問に、20パーセントが「仏教」と答えていました。その次に多かったのが「キリスト教」で10パーセントありました。結婚式は「キリスト教式で」と言う人や十字架

のペンダントを身に着ける人も大勢います。十字架のペンダントは「イエス・キリストの十字架と復活によって私は救われた」ことのリマインダーや信仰の告白として身に着けるのには意味がありますが、悔い改めて福音を信じていなければ、それは、たんなるファッションや、神社でもらってくる「お守り札」と同じようなものになってしまいます。

このような、一時的、感情的な信仰は、「種蒔きの譬」の「岩地に落ちた種」に描かれています。その種は芽を出しても、根がないために枯れてしまいました。福音を聞いても、その心が岩地のように固いままなので、福音がその人のうちに根付かないのです。キリスト教に対する表面的な共感と、悔い改めてイエス・キリストを自分の人生に受け入れることとは違うのです。

第三の「利益だけの信仰」は、英語では「奇蹟の信仰」と言います。イエスが、5千人もの人々にパンを与えた後、その奇蹟を体験した人々が、イエスを追いかけて、同じ奇蹟をしてもらおうとしたことから、そう呼ばれるようになりました。イエスが人々にパンを与えたのは、イエスこそ「いのちのパン」であること、つまり、人々に永遠のいのちを与えてくださるお方であることを示すためでした。イエスは、この奇蹟によって、イエスが罪の中に死んでいる者を生かしてくださるお方、信じる者に永遠の命を与える救い主であることを、人々が信じることができるようにしてくださったのです。それなのに、人々は永遠の命という最高の恵みではなく、パンで

胃袋を満たすという一時的な満足しか求めなかったのです。イエスは彼らに「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです」（ヨハネ 6:27）と言われましたが、この言葉は、「奇蹟の信仰」、日本人に分かりやすく言えば「ご利益信仰」に対するイエスの悲しみがこもった言葉でした。イエスは、私たちに、このような間違っただけの信仰ではなく、まことの信仰を持つようにと教えておられます。

三、まことの信仰

では、まことの信仰とは、どういうものでしょうか。私は、信仰を表すのに、三角形を書き、底辺と、真ん中と、頂点の三つに分けます。底辺に来るのは「知識」です。これは、聖書や神、救いについての知識です。信仰に正しい知識は必要で、それは多いほうがよいに決まっています。三角形は底辺が広ければ安定するのと同じです。その上に来るのは「理解」です。知識は客観的なものですが、「理解」は主観的なものです。「イエス・キリストが十字架で死なれ、三日目に死人のうちから復活された」というのは、客観的な知識です。しかし、知識だけでは信仰にはなりません。知識によって知った事実、真理が、自分のためであったと分かる必要があります。イエスの十字架が私の罪の赦しのためであり、復活が私を救うためであったと分かること、つまり、客観的な知識が、「私のため」という主観的な理解に至る、これが信仰です。ローマ 4:25 に「主イエスは、私たちの罪

のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです」とあって、「私たちのため」「私のため」という言葉が入っています。使徒信条も「私は…信じる」と言っています。こうした言葉は単なるステートメントではありません。この「私」は、神を「私の神」として、イエス・キリストを「私の主」として、聖霊を「私の助け主」として信じますという信仰の告白なのです。

そして、この三角形の頂点には「信頼」という言葉が入ります。「信頼」とは、人格的なものです。イエス・キリストを「私の救い主」「私の主」として受け入れたなら、その時から日々、イエス・キリストに信頼しながら、一日一日を人生の最後まで歩いていくのです。そうです、「日々」です。「毎日」です。今日は信頼するが、明日は信頼しないというのは、本当の信頼ではありません。信仰は決して一時的なものではありません。気分がいいから信じる、気分が悪いから信じない、都合のよいことが起こったから信じる、思いどおりにならなかったから信じないといったものではありません。今、目に見えるところがどうであれ、神が、ご自分のひとり子イエス・キリストを私たちに賜ったほどに私たちを愛してくださっている、この事実を確信して、天の父である神をほめたたえ、私たちの主イエス・キリストに信頼し、私たちの助け主、聖霊に委ねて生活し、人生を生きること、それが信仰です。

きょうの箇所は、まことの信仰は、頭だけのもので

も、感情だけのものでも、また、言葉だけのものでもない、それは実際の行いとなって生活に現われてくるものだということを言っているのです。18節に「行いのない信仰」という言葉がありますが、ここで言う「行い」は決して、何かの儀式を繰り返したり、特別な決まりに従うといった宗教的な「修行」のことではありません。来世の幸福を保証するために行う「善行」のことでもありません。そういった「行い」で人は救われません。罪の問題は、そうしたことで解決するほど簡単なものではないからです。人を罪から救ってくださるお方はイエス・キリストの他なく、私たちが救われる手段は、イエス・キリストを信じる「信仰」の以外にありません。「行い」から「救い」は生まれません。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることをないためです」（エペソ 2:8-9）とある通りです。しかし、「救い」からは「行い」が生まれます。「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです」（エペソ 2:10）とあります。ですから、「行いのない信仰」とは、本当の信仰ではないということになります。

自分の「行い」を振り返ってみて、「私は大丈夫」と言うことができる信仰者はだれひとりいないでしょう。

信仰が深まれば深まるほど、より謙虚にさせられ、自分の足らなさが見えてくるものです。自分の信仰が「行い」を生み出しているだろうかと反省してみることは大切なことですが、あまりにもそのことだけにこだわると、「信仰によって救われる」という恵みを見失ってしまいます。信仰は行いを生み出すのですが、信仰から直接行いが出てくるわけではありません。イエス・キリストを信じる信仰が救いをもたらし、その救いから行いが生まれるのです。「信仰」と「行い」の間に「救い」があることを、そこにイエス・キリストがおられることを忘れないでください。行いの足りない自分であるからこそ、キリストに信頼するのです。信仰によってキリストにつながってこそ、行いの実を結ぶことができるのです。

まことの信仰は神からの賜物です。そしてすべての賜物は神から来るのです（ヤコブ 1:17）。「信じます。不信仰な私をお助けください」（マルコ 9:24）と言ってイエスに願った人のように、信仰を求めましょう。神は信仰を求める者を拒むことはありません。神は「だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる」（ヤコブ 1:5）お方です。自分の足らなさを知って、神に求めましょう。神は求める者に答え、その人を満たして下さいます。

（祈り）

父なる神さま、きょうは、あなたが求めておられる信仰がどんなものであるかを学びました。生まれながらの

私たちの信仰は、信仰とは呼べないようなもので、あなたのみこころにかなうものではありません。そのこと認めて、まことの信仰を求めるとき、あなたはそれを私たちに与えてくださいます。そして、私たちの小さな信仰を養い育ててくださいます。私たちを、なおも、まことの信仰に導いてください。主イエス・キリストの御名で祈ります。

キリストを知る

ペテロ第二 1:1-4

1:1 イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって私たちと同じ尊い信仰を受けた方々へ。

1:2 神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にもますます豊かにされますように。

1:3 というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。

1:4 その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。

一、敬虔な生活

ペテロの手紙第二では、「敬虔な生活」が強く勧められています。しかし、「敬虔」とはどういうことでしょうか。それは、道徳的、宗教的であることでしょうか。もしそうなら、イエスの時代のパリサイ人や律法学者はいちばん敬虔でした。しかし、イエスは彼らの見せかけの敬虔を非難しています。ヘブル 5:7に「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました」とあります。聖書はイエスの生涯を「敬虔な生涯」と言っています。イエスの生涯は罪のない生涯でし

たが、それだけでなく、イエスの生涯は、神に信頼し、神に従う本物の敬虔を示すものでした。

ローマ 1:18 に「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されている」とあるように、人間の罪には、不正や不道徳だけでなく、神を神として崇めず、恐れず、従わない「不敬虔」も含まれています。そして、イエスがその命を献げてくださったのは、私たちをその「不敬虔」から救い出すためでした。ローマ 5:6 に「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました」とあるように、敬虔なお方が不敬虔な者のために死なれたのです。テトス 2:11-14 は、神の救いとは、私たちを不敬虔から敬虔へと導くものだと教えています。大切な箇所ですので、読んでおきましょう。

というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。

ペテロの手紙第二 1:3 に「いのちと敬虔」という言葉がありますが、これは「敬虔な生活」と言い換えてもよいでしょう。 私たちは、かつて、「敬虔な生活」とは程

遠い者でした。神を敬い、神に喜ばれようとするよりは、自分が誉められ、自分を喜ばせることが人生のすべてでした。世界が自分を中心に回っていると思い込み、そのような生き方をしていました。テトス 2:12 にあるように、「不敬虔」と「この世の欲」とは、聖書では、よく一緒に使われます。私たちは、かつて、この世にどっぷり浸かり、この世の欲に支配されていたのです。ヨハネ第一 2:15-16 に「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです」とあります。「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」といったものを追い求め、それを満たすことが幸せになることだと信じていました。

しかし、この世のものはやがては去っていくもので、人はこの世のものでは、ほんとうに幸せになることはできません。この世でどんなに成功しても、それはわずかの間のことで永遠には続きません。しかし、神とキリストのために、信仰によって行うことは決して無駄にはなりません（コリント第一 15:58）。「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます」（ヨハネ第一 2:17）。

昨年、コロナ・ウィルスの感染が拡大したとき、私たちの町では、人々を励ますために “Richardson, Strong!” というヤード・サインがあちらこちらに掲げられまし

た。「コロナに負けるな。強く生きよう」というわけです。確かに、このようなときには、困難に負けない強い意志が必要です。また、さまざまな報道に一喜一憂する私たちには「平安」も必要です。物事は必ずよくなるという「希望」も必要です。国連の事務総長が言うように、今年「癒やしの年」であって欲しいと思います。しかし、困難の中で私たちを支える「力」、揺るがない「平安」、確かな「希望」などはどこにあるのでしょうか。それは、この世にはありません。キリストにしかありません。そして、それはキリストが与えてくださる「敬虔な生活」の中ではじめて体験できるものなのです。

神を知らない人は、「こんな時に『敬虔』なんて、何の役にも立たない」と言うかもしれませんが、そうではありません。神の国とその義を第一にすると、必要なものが与えられるとイエスは言われたではありませんか（マタイ 6:33）。主を喜ぶことが、私たちの力になるのです（ネヘミヤ 8:10）。神は「神を愛する人々…のために…すべてのことを…益としてくださる」のです（ローマ 8:28）。

聖書は「肉体の鍛練もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です」（テモテ第一 4:8）と教えています。この年が「癒やしの年」となるために、私たちは、この世のものに振り回されるのではなく、「敬虔な生活」に目を向け、それを目指していきたいと思います。

二、キリストの似姿に

さて、神が、私たちに「敬虔な生活」を送る力を与えてくださることを「聖化」(sanctification)と言います。3節には、「主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与える」とありました。聖化の力はイエス・キリストから来るのです。4節では「聖化」が具体的に「神のご性質にあずかる」ことだと教えられています。「この世の汚れ」から聖められ、「世にある欲のもたらす滅び」から救われるだけでなく、もっと積極的に、「神のご性質にあずかる者」となる、私たち被造物が永遠の神のご性質にあずかるというのです。

「神のご性質にあずかる」とありますが、それはどのようなにしてなのでしょう。それは私たちが神から生まれることによってです(ペテロ第一 1:3、ヨハネ第一 5:1)。子どもは親の遺伝子を引き継いで生まれてきます。それで、年齢が進むにつれて、父親や母親に姿形が似てくるのです。神もまた、イエス・キリストを信じる者を「神の子ども」として生んでくださいました。そこには、神の子どもではなかった者を養子にしてくださいましたということも含まれていますが、それだけではなく、神は、聖霊によって、私たちを実際に神の子どもとして生んでくださったのです。あえて言うなら、神の子どもたちは、神からの霊的な DNA を受け継いで生まれたのです。父なる神が人としてのイエス・キリストにお与えになったのと同じ性質、つまり、イエスが持つておられた

聖さや正しさ、神への信頼や従順、また人への愛やいつくしみなどを持つ者としてくださったのです。ですから、「神の性質にあずかる」とは、神のひとり子である「キリストに似た者になる」ということでもあるのです（ローマ 8:29、ヨハネ第一 3:2）。

しかし、子どもが親に似るといっても、DNA がすべてを決定するわけではないように、私たちが「神のご性質にあずかる」のも、生物学的、自動的なものではありません。たとえば、遺伝的なつながりのないアダプトされた子どもでも、親子の愛の関係の中で育てられていくと、顔や姿まで似てくるものです。人は、いつも関わっている人と似てくるというのは本当のことです。私たちは、神の子どもとして生まれることとともに、神とのまじわりの中に生きることによって、神の子どもの性質が成長していくのです。それは、日々の生活の中で、また、人生の歩みの中で、どれだけ神と深くまじわったかによるのです。「神のご性質にあずかる者」というところで使われている「あずかる者」という言葉は、「まじわり」を意味する「コイノニア」という言葉から出た、κοινωνός（コイノーノス）という言葉が使われています。この言葉は聖書では「仲間」（マタイ 23:30、ヘブル 10:33）と訳されますが、「仲間」といっても、ただいっしょにいるだけというのではなく、パウロがピレモンを「親しい友」（ピレモン 1:17）と呼んだように、苦しみも、慰めも、患難も栄光も共にするような間柄を表します。イエス・キリストは私たちを「友」と呼んでくださいまし

た。そうであるなら、私たちは、罪も弱さも含めて、イエス・キリストにすべてを知っていただき、私たちもイエス・キリストのすべてを知りたいと願うはずです。「キリストを知る」というまじわりの中で、私たちは神の子として成長し、キリストに似たものとされるのです。

三、キリストを知る

続く5-7節に、キリスト者の成長の姿が具体的に描かれています。こう書かれています。

こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。

私たちの霊的な成長は、信仰が土台となり、愛に向かって成長していくものです。ここにはキリスト者の成長の目標と、そこに至る道筋がはっきりと書かれています。この成長の青写真に従い、励みたいと思います。

しかし、もし、私たちが「イエス・キリストを知る」ことを怠るなら、この御言葉も「絵に描いた餅」で終わります。次の8節に「これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません」とあります。ここで「キリストを知る点」と訳されているところは、原語では「キリストの知識」(knowledge of Christ)となってい

ます。もちろん、この「知識」は、インターネットで「キリスト」という言葉を検索して得られるような情報としての「知識」のことではありません。それは、キリストに出会い、キリストを信じ、キリストを受け入れることによって得られる人格的な知識です。また、日々の生活の中で、イエス・キリストに信頼し、従うことによって、イエス・キリストの恵みを受け、「イエス・キリストは生きておられ、私に、このようなことをしてください」と、証しすることができるような体験的な知識です。

8節に「役に立たない者」や「実を結ばない者」という言葉もありますが、これはイエスを受け入れようとしなかった人々に対して語られたイエスの譬の中にある言葉です。私たちも、「キリストを知る知識」において、「役に立たない者」や「実を結ばない者」になることがないように、励みたいと思います。

ペテロの手紙第二の最後の言葉を読んで終わらしましょう。

「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。」（ペテロ第二 3:18）

「イエス・キリストの恵みと知識において成長する。」 私たちには、なんと明確な目標が与えられていることでしょう。皆さんは、今、仕事のことや家庭のこと、人生のことなどで、今年の計画・予定、また目標を思い巡ら

していることでしょう。その中に、「敬虔な生活」というゴールがあるでしょうか。そのための力、聖化、きよめの力をキリストから受けるために、もっと「キリストを知る」、そのための具体的なプランを持っているでしょうか。年のはじめに、そうした霊的な目標を持ちたいと思います。そのために、きょうの御言葉を思い返し、神の導きを待ち望み、祈りましょう。

(祈り)

父なる神さま、あなたは私たちを義と認めてくださったばかりか、私たちを聖めて、あなたのご性質にぞかる者、また、御子に似た者になるようにしてくださいました。そして、私たちが聖められ霊的に成長するための力のすべてを、イエス・キリストにお与えになりました。この年、私たちに、イエス・キリストを知ることと、そこから来る聖化の恵みにあずかることができるようにしてください。敬虔な生活から生まれる確かな平安、確かな希望、確かな癒やしを体験することができますように。この年を、まことの救い主イエス・キリストを知り、信じている幸いを深く味わう年としてください。イエス・キリストのお名前です。

パウロがルカオニヤで奇蹟を行ったとき、人々はバルナバをゼウス、パウロをヘルメスと呼んで、ふたりにいけにえをささげようとしていました。そのとき、パウロは、「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです」と言って、それをやめさせました（使徒 14:15）。

また、アテネで、パウロは「この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです」と語りました（使徒 17:24-25）。

ローマ 1:20 には「世界の創造」、ガラテヤ 6:15 には「新しい創造」、エペソ 3:9 には「万物を創造された神」という言葉があります。ペテロも神を「真実であられる創造者」と呼んでいます（第一ペテロ 4:19）。ヨハネの黙示録でも、神は万物の創造者として賛美され、宣言されています（黙示録 4:11、黙示録 10:6、黙示録 14:7）。聖書は天地の創造、キリストにある新創造、そして、終末における創造の完成を語っています。じつに創造は信仰の基礎です。



Penguin Club

www.penguinclub.net